

あずさゆみ



今年は『入来文書』の邦訳出版があり、福島の朝河貫一顕彰協会主催の「入来新能」に合わせ、朝河貫一を訪ねる入来の旅」は四十三名もの参加者があった。

迎える鹿児島で行なわれた、記者矢吹晋横浜市立大学名誉教授の講演は、入来文化ホール満員という盛況だった。「このような学術的な講演に、こんなに大勢集まるとは、鹿児島の文化程度は高い」とは福島の方々の感想であった。

前夜、市比野で行なわれた歓迎会に出席したKKBの百田専務は、「一学者の顕彰会の旅に四十三名もの人が、はるばる鹿児島まで来るということは、鹿児島では考えられない。福島県人の文化に対する情熱は、大したものだ」との感想をもらされた。交流がこころしいの良さを認識しあい、

刺激を与えあうことになるとは、何と素晴らしいことだろう。

九月二十四日、鹿児島からお戻りの後、イェール大学、ダートマス大学、紐育コロンビア大学と1忙しく打ち合わせを済ませてお戻りになった矢吹先生からのメールが入った。

「十一月二十二日郡山でも『入来文書』の出版記念会を開く予定が固まりました。

入来での盛況に刺激されて、郡山でもぜひやろうと、糠沢さんや武田さんなど、入来訪問組が元気になっているのです。

つまり、薪能からエネルギーを頂戴したわけですね」

くたびれ果てた入来院貞子よ、もって瞑すべし。

薪能の翌日、一行は池田湖、知覧を巡る旅程だった。勿論、特攻記念館が目的であった。

五月に私たち夫婦の福島訪問の後で、佐藤栄佐久福島県知事から、知事の講演録とともに早乙女貢の『会津士魂』の二本松少年隊の部分を送って

頂いていた。白虎隊といい、二本松少年隊といい、教育によつて一途に信じた道に従い、あたら若い命を散らしたのだ。

私は母として、飯盛山の白虎隊の墓に彫られた十六、七の年齢を読んだとたんに涙が吹き出たのだ。若きを悼む思いは特攻隊にも通ずる。特攻隊員の若さにも、その純粹さにも幾度訪れても私は泣かされる。

先日、名月鑑賞会というところで、宮之城の方々と集う機会があつた。私は何度かお会いしたただつた社長さんに、宮之城で仕事を始められた訳を伺つた。

「私は昭和四年生まれで、神戸にいました。焼け出されてましてね、戦後三年ほどして祖母のいた宮之城に来たのです」
彼は続けた。

「中学三年のとき、学徒動員で軍需工場に徴用されたんですよ。そこでは人間魚雷を作っていましたね。人間一人の分しかない座席にタガネで「武運長久」とか「戦果達成」とか彫り付けていまし

た。まさか自分が乗るなんて思つてもみなかったですよ。特攻は空からでしょう。回天は爆薬を積んで自分で操縦するんですが、僕たちの作つていた人間魚雷は弾丸として水中から打ち出されるんですよ」

「えつ、弾丸に人間の判断する余地があるんですか」

「それは、多少の操作があるんでしょう。乗せられたのは、昭和二年、三年生まれの学徒動員の生徒たちの志願者でした。そのうち僕たちの学年まで来て、僕も志願したんですが、僕の番まで来ないうちに終戦になったのです」

私はびっくりして、声もでなかつた。

「子供でしたし、志願しなくては人間でないといつた雰囲気でしたからね。昭和二年、三年の人たちが何百人と死んでいる筈です」

学徒動員の記録を検索してみると、それらしき物を作っている記録はあるが、回天としか書かれていない。回天には帰還者もいるのだ。都会の軍需工場に動員された中学生が、本当に無名のまま知

られることも、祀られることもなく、弾丸として
打ち出され消えて行ったのだろうか。

終戦のとき六年生だった私の脳裏には、楠木正
行（まさつら）が吉野の如意輪堂の扉に矢尻で彫
りつけている絵がふと浮かんだ。

帰らじとかねて思えばあずささ

なき数に入る名をば留むる

名も何も留めることもなく消えて行った少年の
戦争犠牲者たちの事実を、是非生存者のいる間に
記録しなければと思ったことだった。

